

## ユニークな地質系博物館(シリーズ)

# 1. 博石館

奥山(楠瀬)康子<sup>1)</sup>・坂巻幸雄<sup>1)</sup>・豊 遙秋<sup>1)</sup>

岐阜県東部の「苗木地方」は、明治以来今日に至るまで多くの鉱物愛好家をひきつけてきた、日本を代表する鉱物産地である。この地方に分布する花崗岩体は「晶洞」とよばれる空隙を持っており、その中に花崗岩そのものをつくる石英・長石のほか様々な鉱物が、整然と自形の結晶をなして群生するのを、しばしば目にすることができる。かつては見事な大型の結晶を多産したことがあるトパーズは、苗木地方を代表する鉱物として多くの博物館の陳列ケースを飾っている。

「博石館」は苗木地方に産する鉱物を主に展示する石の博物館で、この地方で現在最も注目される鉱物産地である恵那郡蛭川村にある(写真1)。鉱山跡地に立地するものを除いた地質系博物館の多くが、なんらかの公的機関によって設置され運営されることが多い中で、この博石館は地元で花崗岩石材を採掘・販売する株式会社「岩本」によって設立・運営されている。そしてこのことが、博石館にユニークな性格を与えることとなっている。

まずは、博石館本館に入ってみよう。自然光を十分に

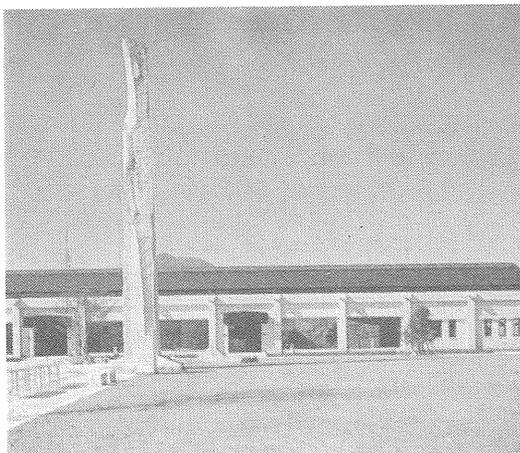


写真1 博石館本館の遠景。手前側のオベリスクは、節理にそって切り出した一本物の花崗岩材(高さ13m)できている。



写真2 博石館本館の内部。石造りのショーケースがゆったりと配置されている。

取り入れた石造りの建物の中は、大きな柱や壁で仕切られることなく広がり(写真2)、林立するパネルや背の高いショーケースが視界を遮る、博物館にありがちな空間利用になじんだ目を戸惑わすかのようである。説明のパネルは必要最小限にとどめられ、しかも最近新しく設定された見学順序にしたがえば、それらは美しい鉱物の数々を堪能した後に登場することとなる。お目あての鉱物標本の大部分は、大人の腰くらいの高さのショーケースにちんまりと並べられている。このショーケース、本体はこの地方の花崗岩をはじめとする各種の石材できているという、ほかでは見ることも考えることもできない個性的なものである。博石館構内には観光用の目玉になっているピラミッドをはじめ、様々な構築物がつくられているが、その大部分は当然のように地元の花崗岩を使ったものである(写真3)。こうした館の造り全体が石の利用についてのディスプレイにもなっているわけで、さすがと思わずにいられない。

本館の展示標本は地元の花崗岩晶洞から産した石英・長石をはじめとする各種の鉱物が中心で、ほかに内外から集めたペグマタイト鉱物、宝石鉱物などが展示されている。水晶・長石だけではなく、トパーズやチンワルド雲母など苗木地方を特徴づける鉱物や、ベルトラン石のような稀産鉱物についても、よい標本を揃えている。こうした標本類のそもそもの始まりは、本社事務所二階に

1) 地質調査所 地質標本館

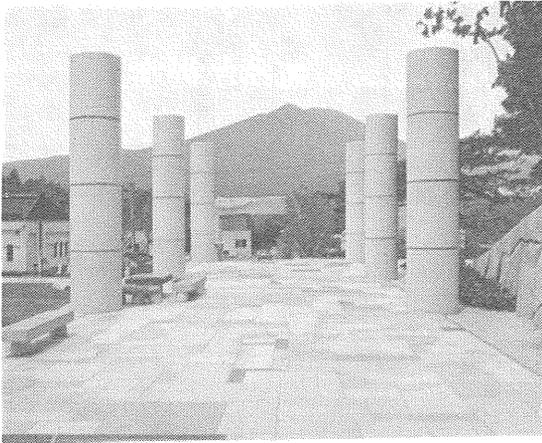


写真3 花崗岩の白がまわりの緑にはえる。遠方は、蛭川のシンボル、笠置山。

業務の進行とともに集まってきた水晶の標本であったと聞いた。標本の選定や展示法、そして説明についても、日本地学研究会のバックアップを得つつ、企業による博物館としてはなかなかの努力と工夫がなされている。

庄巻は、全重量7トンにのぼる巨大な晶洞標本だろう(写真4)。花崗岩塊の中の径1.5mほどの空隙に腕の太さほどもある黒水晶や長石が群生するこの標本一つをとって見ても、背後に現場をかかえる博石館の強みを感じずにいられない。もちろん、中型・小型の晶洞標本は、館内のいたるところに置かれている。

この晶洞標本についてこんな話を聞いた。2~3cm大の鉱物が群生した晶洞標本のうち、ガラス板による「防御」が少々甘かったものは、開館後約2年のうちに丸裸になってしまったと。来館者が苦勞といささかの怪我の危険を省みず、「採集」していったらしい。街中の博物館ならば大きな痛手になるであろうこうした心無い行為が、現場を持つ強みなのだろうか。あえて言わせていただければあまり深刻な痛手とは感じられなかった。

なんともうらやましい限りである。もしそうであれば逆に博石館は、見学者が直接石と触れ合えるよう積極的に施設を整備しスタッフを揃えることによって、これまでのどの地学系博物館にもみられないような見学者参加型の博物館に発展できる下地を持つといえるわけである。無数の晶洞の眠る花崗岩採掘現場に加え、お手のものの石材加工技術がこうした試みを十分支えるであろうことは、本館前の芝生のすみにさりげなく置かれた「力石」(さまざまな重量の整形した石のブロックに取っ手が付いたもの。どうぞ力試しを!)をみても、十分に察せられる。地方にあってはややむずかしいことがあるかも知れない

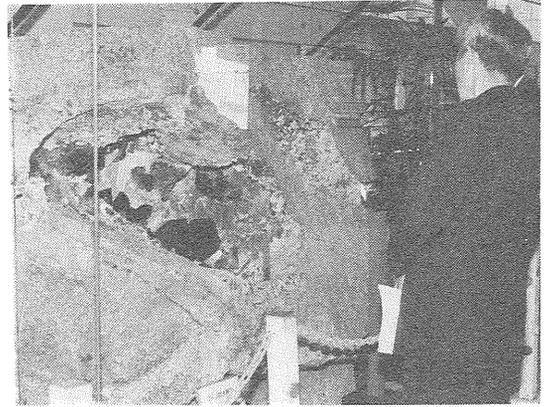


写真4 重量7 tの大晶洞標本。

が、一般見学者と「石」との間をとりもつ専門家のスタッフを増強し、ぜひこうした方向へ向かってほしい。

鉱物中心の本館の傍らで目だたなくはあるが、隣接する「みかげ館」では各種の石材と加工技術のバリエーションを知ることができる。研究用の岩石に触れる機会の多い筆者らにとっても、得るものが大きかった。

なお、苗木地方の鉱物に格別の関心をお持ちの向きには、故長島乙吉氏のコレクションの見学をおすすめしたい。この地方では蛭川村の村営施設「紅岩山荘」に隣接した展示館と、中津川市苗木公民館で見学することができる。

最後に、この一文をお読みになって博石館見学に向かわれる方へ。展示中の晶洞標本からの「鉱物採集」は、くれぐれも慎んでいただきますように。

- 博石館 〒509-83 岐阜県恵那郡蛭川村田原  
TEL (0573) 45-2110(代)  
入館料 大人 800円 子供 500円  
(20名及び100名以上 団体割引)  
開館時間 9:00~17:00  
(入館は16:00まで)
- 休館日 年末・年始
- 紅岩山荘 〒509-83 岐阜県恵那郡蛭川村奥渡  
TEL (0573) 45-2245
- 苗木公民館 〒508-01 岐阜県中津川市苗木  
TEL (0573) 66-1328

OKUYAMA-KUSUNOSE Yasuko, SAKAMAKI Yukio, and BUNNO Michiaki (1990): Geological Museums in Japan 1. "Hakuseki-kan"

<受付:1990年5月1日>